大分合同新聞
www.oita-press.co.jp
5/23 月曜日
朝刊
創刊1886年（明治19年）
大分合同新聞社
〒870-8605 大分市府内町3-9-15
© 大分合同新聞社 2016
大分 097-536-2121 別府 0977-22-2121
FAX 097-538-9674 FAX 0977-25-1230
朝夕刊 完全連続紙
単独販売の朝刊、夕刊、統合版はありません。

木質バイオマス発電

排熱エネ増す期待

暖房費抑え加温 農業ハウス完成

日田「活用モデルに」

木質バイオマス発電所の排熱で加温する農業ハウスが、日田市天瀬町に完成した。冬場の冷え込みが厳しい地域で、暖房費を抑えた低コストのイチゴ栽培が可能になるという。木質バイオマス発電所の排熱エネルギーは発電で得られる電力エネルギーよりはるかに多く、有効利用への期待は大きい。全国各地に地域の未利用材などを燃料とする発電所が新設される中、農林業や地域の活性化につながる活用モデルとして注目されそうだ。

ハウスは約1200平方メートル。未利用材を使うグリーン発電大分天瀬発電所（出力5700キロワット）の隣接地に、地元の農家、長尾雅子さん（62）が約2600万円（半額は補助金）をかけて建て、3月に完成した。

気温が氷点下10度近くまで下がる冬場、24時間運転の発電所から、発電設備の冷却に使った水（35度）を1日1円で調達し、室内と培地を温める。「補助的に重油ボイラーも使うが、あまり暖房費をかけずにイチゴ栽培ができそう」と長尾さん。9月に初めての植え付けをする予定だ。

バイオマス発電所側の期待も大きい。先進地の欧州では排熱も地域暖房などに有効に使われているが、日本はまだまだ。グリーン発電大分の森山和浩代表取締役は「天瀬発電所の発電効率は25%。残りの未利用エネルギーもできる限り使うことで、地域資源である未利用材の有効利用をさらに進め、林業再生や農業振興に貢献したい」と話す。

木質バイオマス発電所（奥）から排熱温水の供給を受ける農業ハウス。長尾雅子さん（右）と息子の勝己さんがイチゴを栽培する＝日田市天瀬町

この計画は、同社の前代表取締役、森山政美さんと長尾さんの夫・正臣さんが地域活性化の思いを胸に進めていた。正臣さんは2015年1月、道半ばで急逝。遺志を継いだ長尾さんは「念願のハウス。バイオマス発電を農業に生かすモデルとして、全国の参考になるイチゴ作りをしたい」と意気込んでいる。

（糸永健太郎）